



昭和 54 年 8 月：印刷新報掲載

業界唯一の専門図書館として 13 年間のブランクを克服し再開

印刷図書館が再開して 15 年になる。業界唯一の図書館として、その 15 年間の歩みは印刷業界の発展に大きな役割を果たしてきた。

しかし利用者は印刷業界の中にあってもごく一部の人間に限られ、逆に印刷をもっと知りたいという一般人の熱心な利用も見られるという面もあり、印刷人であってもその存在さえ知らない人もいるという。

再開 15 周年にあたり、館長の沢田巳之助氏に図書館 15 年の歩みと今後をお書きいただいた。これを機に、図書館への一層の理解を望みたい。

=編集部=

■ 語る人

沢田 巳之助 氏
(印刷図書館館長)

(1) 終戦直後に開設

印刷図書館が再開してから早くも 15 年になった。昭和 38 年、東京・新富に現在の日本印刷会館が建設されたとき、10 数年間休館していた図書館を開こうという計画がもたれ、印刷業界ならびに印刷関連業界の多くの人々の善意と支援によって、維持されてきたのである。ここには印刷に関する内外の雑誌や図書資料を年々収集してきたので、今では印刷の専門図書館として高く評価されるようになっている。

印刷の分野に限って言えば、おそらく国立国会図書館にも、また各大学図書館にも無いものが、この印刷図書館には所蔵しているという誇りを持っている。それだけに最近では印刷以外の人々も閲覧に来るようになり、印刷情報資料の調査研究のために、大きく貢献する存在となっている。

再開後の歩みを回顧する前に、この印刷図書館の生れた事情について、簡単に述べておきたい。

そもそも印刷図書館の誕生は、戦前の昭和 13 年頃から印刷界の先駆者であり、日本印刷学会の創立当初からの会長であった矢野道也博士の熱心な提唱によって計画されたものであったが、太平洋戦争の激化と印刷業界では企業整備など戦時体制に入ったため、実現を見るに至らなかった。

終戦後になって、まだ戦後の混乱期とも言える昭和 21 年に、日本印刷学会の再建があったとき、印刷図書館設立準備委員会（委員長伊東亮次氏）が作られ、大日本印刷、凸版印刷、共同印刷その他業界の協賛もあって計画が進められ、昭和 22 年 3 月には時の文部大臣高橋誠一郎の名で、財団法人印刷図書館設立の許可があった。当時財団法人設立の基本財産 30 万円は、佐久間長吉郎、山田三郎太、大橋芳雄の 3 氏から各 10 万円ずつの寄付金であり、ほかに運営資金として 125 万円の募金が多されたのである。この募金は印刷産業総合統制組合、東京都印刷業統制組合、日本印刷製本機械製造工業組合、印刷インキ工業統制組合、新聞協会等の団体が協賛して、それぞれの各企業からの寄付によるものであったが、いま当時の寄付者内訳の名簿も残っているが、一口百円から 3 万円位まで約 400 社の多数の人々が協力している。

図書館はその頃、大日本印刷の好意によって銀座 7 丁目の同社サービスステーションの 3 階に、日本印刷学会の事務所とともに開設されたのであった。館長には印刷史研究者として著名な川田久長氏が就任し、図書の収集に尽くされていたが、銀座時代の蔵書数は千数百冊であったという。

昭和 26 年になると、図書館も印刷学会もこの建物から立退く運命となったが、図書館としては移転して開設するための適当な場所がなかったので、止む無く休館することとなり、当時の蔵書は印刷学会出版部や日本書籍の倉庫に保管を託して、10 数年間眠り続けていたのであった。

(2) 日本印刷会館の竣工と再開

昭和 38 年、中央区新富町に 7 階建の日本印刷会館ビルが完成したとき、この一部に印刷図書館を再開したいという声が、業界有志

の間で語られていた。これを聞いた長老の佐久間長吉郎氏も熱心に支援されていたのである。

再開へ具体的に歩み出したのは、日本印刷工業会の山田三郎太氏や光村利之理事、井関専務理事などが推進力となって、日本印刷工業組合連合会、日本印刷学会等の首脳部および関係者に呼びかけて、印刷図書館再開準備協議会を開いたことに始まる。昭和 38 年 10 月 10 日のことで、この日の出席者は以下の 18 名であった。

山田三郎太、大橋芳雄、佐久間長吉郎、松島徳三郎、大橋貞雄、川口芳太郎、長宗泰造、唐沢泰宏、光村利之、竹村豊作、新村長次郎、井関好彦、中井四郎、馬渡力、佐野迪、鈴木金蔵、市村道徳、沢田巳之助。

この席で財団法人の寄付行為（定款）に基づいて、理事 13 名、監事 2 名、評議員 40 名、顧問、相談役等を選任した。また同時に財団法人の理事長、図書館の館長には、当時日本印刷工業会の会長であった大橋貞雄氏が就任、ここで実際的な開館準備の活動が始まり、図書館の実務上の仕事については沢田巳之助が主事として専従することになったのである。

しかし何と言っても 10 数年間も休館していたブランクの時代が長かったので、この期間に発行されている印刷関係図書の収集や、新刊の雑誌やそのバックナンバー、業界新聞等を取揃えることから活動が始まり、各方面に刊行物の寄贈依頼をしたのであった。幸いにも依頼先からは好意を寄せられ、印刷学会出版部、印刷出版研究所、日本印刷新聞社、印刷時報社、産業図書、共立出版、丸善、平凡社、印刷局、その他多くの出版社から、印刷に関係する出版物を快よく寄贈され、また業界雑誌、学会の会報、諸新聞、関連団体の会報類も続々と集まってきた。

かくて開館の準備も整い、印刷図書館は昭和 39 年 4 月 1 日から、日本印刷会館 33 階の 1 室（24 坪）に再開し、誰れでも自由に閲覧出来る専門図書館として公開したのであった。



(3) 内外の貴重な文献 7,300 冊

多くの理解者の寄贈も得て蔵書も年々充実

印刷図書館として再開した当初の蔵書は僅かに千数百冊に過ぎなかったが、15 年経過した現在では、蔵書数 7,300 冊になり、逐次刊行物（新聞、雑誌、会報等）は 140 点が入っている。

いまこの内容を紹介するには、紙面の都合で割愛せざるを得ないが、明治中期以後、大正、昭和時代の印刷に関する文献図書、最近の印刷技術書を始め、経営、労務、統計の類から印刷史、社史、伝記に至るまで、印刷分野の図書は殆んど網羅していると言っても過言ではないであろう。

とくに図書館が再開してから、まとまった図書の寄贈について紹介しておきたい。

昭和 40 年には、光村原色版印刷の光村利之氏が図書館のために、氏が多年所蔵していた図書を約 800 冊ほど寄贈されたことである。この中の大部分は印刷雑誌社を経営していた郡山幸男氏の蔵書が含まれている。郡山氏は大正時代から印刷界のため啓蒙的な活動をしていただけに、今では入手不可能な、貴重な印刷関係図書及び印刷の洋書が多数あったので有り難いことであった。

昭和 41 年には、多年、東京高等工芸学校の教授であった伊東亮次先生の蔵書千数百冊がご遺族の好意によって、そっくり印刷図書館に寄贈された。この中には先生が大正時代の欧米留学時代に集められた本のほか、明治以後に刊行された内外の印刷関係図書の多くが大切に保存されていた。

再開当時、印刷出版研究所山崎正社長（当時）からは、同社の創立者福永伸三氏の一周忌にあたり、福永文庫基金として業界のため役立ててほしいという趣旨で、金 50 万円を日本印刷工業会に寄託されたとき、工業会では寄付者の趣旨に沿うべく、印刷図書館の購入資金として回された。この資金が百科事典を始め、各種辞典や参考書など図書館として備えておきたい基本図書の購入に充てられた



のである。

また昭和 42 年には、印刷評論家として長く活躍された橘弘一郎氏の没後、残された蔵書のうち印刷関係の図書資料 100 点ほどが庄司浅水、藤田初巳氏の配慮により、当館に寄贈されたのである。

雑誌のバックナンバー

「印刷雑誌」は明治 24 年に秀英舎の佐久間貞一によって創刊された最古のもの。この雑誌はその後「印刷世界」となり、また郡山幸男氏の手で経営されるなど幾多の変遷はあったが、ともかく現在まで 88 年間も継続発行されている珍しい雑誌だ。印刷図書館には同誌の創刊号以来の合本が全部揃っている。初めは欠号も相当多かったのであるが、再開以来各方面の所蔵家からの寄贈によって揃えることが出来た。印刷の歴史を調べるものにとって、この「印刷雑誌」は貴重な資料になっている。

その他「印刷界」は昭和 25 年の創刊号以来の合本が全部揃えてあり、「印刷情報」は昭和 34 年からのもの、「印刷時報」は昭和 30 年からの合本を保存してある。

また業界新聞では「印刷新報」「日本印刷新聞」「印刷ジャーナル」「印刷タイムス」なども、昭和 39 年に印刷図書館が再開してからの新聞は全部製本して保存してあるので、過去のことを調べる人々には、古い新聞もよく利用されている。

外国雑誌の数々

アメリカ、イギリス、ドイツ等の印刷関係の外国雑誌はいま 34 点ほど購入しているが、これらはすべて「逐次刊行物リスト」に記載してある。この中で主なものをあげると

アメリカの雑誌では

グラフィック・アーツ・マンスリー
ブックプロダクション・インダストリー
インランド・プリンター
アメリカン・インキメーカー その他

イギリスの雑誌では

ブリティッシュプリンター
プリンティングワールド
リソプリンター



PIRA プリンティングアブストラクト

ドイツの雑誌

ドルックスピーゲル

ポリグラフ

パピールウントドルック

ドルックープリント その他

いずれもバックナンバーを保存してあるので、古い雑誌を調べにくる人も相当ある。

その他

TAGA や IAR-GAI のプロシーデングも揃えてあるので、よく閲覧されている。

またペンローグ年鑑は近着の 1979 年版が第 70 巻になっているが、印刷図書館には 1897 年版のものから、ほぼ揃っており 60 冊ほどになっている。世界の印刷事情の歴史がここにはある。

外国の印刷雑誌をこれだけ多く揃えてあるだけに、欧米の新しい情報を調べる人々によって、最もよく利用されている。

図書目録の刊行

印刷図書館に受入れている図書資料のすべては、利用者の便を図るため、図書目録を印刷、刊行している。

「図書目録」の第 1 冊は、昭和 40 年 2 月にその当時の蔵書を全部収載した 104 頁の冊子である。この目録には、光村利之氏から寄贈を受けた本を始め、旧図書館時代から引継いだ本もすべて掲載してある。

第 2 冊目としては、昭和 42 年 5 月に伊東亮次先生からの寄贈書を整理し、これを永く記録するために「伊東記念文庫目録」(95 頁)を刊行し、維持会員や関係各方面に配布した。

昭和 45 年には、その後の新規受入図書を含めた「図書目録」(40 頁)を刊行している。

それ以後は毎年ごとに、新しく受入れた図書の紹介を目的に、B5 判 4 ページの新着図書目録を、毎年印刷刊行して会員方面に配布し



ているが、本年までに7回発行してきた。

その他「逐次刊行物リスト」(B5-4頁)を刊行しているが、これは現在引続き図書館に受入れている業界新聞、雑誌、年鑑、印刷や関連業界の会報、学会誌、PR誌など、定期刊行物など約130点、英米独等の外国の印刷雑誌36点を収録して、利用者のために提供している。

(4) 名物行事となった印刷史談会

史談会と文化財保存に新村氏が1千万円寄贈

図書館の利用状況

図書館の閲覧者はどのくらいかと言うと、昭和39年に開館した当初は年間5、6百名に過ぎなかった。しかしその後、印刷図書館の存在が漸次知れわたるに従って、閲覧者の数もようやく増えてきて、最近では年々千数百名の人々が、印刷についての調査や研究のために来館するようになった。

この15年間の閲覧者数を調べてみると、その総数は1万7千名以上になっている。来館者の多くは、印刷会社を始め機械、インキ、洋紙等の技術者が主であるが、一方、育英高専、東京工芸大学、千葉大学等の印刷専攻の学生も多く、また他大学の学生なども印刷産業の実態を調査するためにきている。

印刷図書館のことは、数年前に朝日新聞の「ふみくら」欄や、東京新聞、図書新聞、その他の雑誌にも時折紹介されているので、印刷、関連業以外の人で、印刷に関心を持つ人々の来館も相当数に上っている。

この点から考えると、印刷図書館は広く社会のために開かれた印刷の窓口という使命を果たしているとも言えるだろう。

図書、雑誌の貸出しや、文献の複写サービスは、維持会員になっている会社の社員に限られているが、これら会員会社の利用をみると、今日までの貸出人員の総数は4,500人に達しており、この内訳をみると洋書(主に外国雑誌)は4,294冊、和書(図書と雑誌)は4,850冊という実績である。



印刷史談会の開催

印刷文化の過去の歩みはどのようなものであったか、明治・大正の時代から印刷とともに歩んできた業界の先輩古老から、その回顧談を聴くために史談会を続けている。印刷技術の発展の跡、過去の印刷業者のこと、この長い歳月を印刷の中で生きてきた人にはそれぞれの歴史を持っている。印刷史談会ではその人の体験を語ってもらい、印刷史の一面としての貴重な記録となるだろうとの趣旨で、これからも随時この会を続けて行きたいと考えている。

この史談会の録音テープは印刷図書館に保存してあるが、同時に談話の速記はその都度『印刷新報』紙上に連載してきたのである。印刷史談会は去る昭和 41 年 11 月から始めているが、現在まで講師として談話を残されている人々は以下の方々である。(敬称略) 鎌田弥寿治、松島徳三郎、宇田川庫吉、光村利之、伊藤集、市川憲次、佐久間長吉郎、永田喜健、近藤林蔵、市村駒之助、成田潔英、高橋与作、江森八十吉、曾雌源、鈴木喜三郎、和田栄吉、箱木一郎、石田善通、島田万次郎、津田太郎、津田藤吉、中村源一郎、鳥本忠次、若林孟夫、吉原良三、益田六十郎、小島初夫、新村長次郎、井関好彦、小堀基之助、柏木兼一、谷本正、中村櫛の諸氏 33 名である。

今になってみるとこの中には、すでに故人となられた人々も多い。史談会の出席者も毎回 30 名前後の人々が聴講し、講師を中心に和やかな懇談のひとつときを過ごしている。

印刷文化財の保存運動

印刷図書館で印刷文化財の保存と収集に取り組んだのは昭和 44 年からだった。運営委員長の市村道德氏を始め、委員の土井庄一郎、安達秀雄、山本隆太郎その他の諸氏は、この必要性を感じて「印刷図書館ニュース」その他の雑誌新聞に意見を発表してきた。大阪には早くから印刷文化財保存会があるのでその会の中田祐夫史や中根勝氏とも懇談して運動の進め方を相談。業界の各方面にも協力を呼びかけるとともに、このための小委員会を開き、また印刷史や文化史に通暁する人々により専門委員会を設けて、保存構想の具体化を進めるため努力を続けてきた。

一方この運動に協賛して、資金面では新村長次郎、大橋貞雄、安達秀雄、白橋竜夫、市村道德の諸氏からも多額の寄付金があり、印刷文化財の収集に役立てている。



これにより収集したものでは、明治初期からの珍しい印刷物を集めていた高部英治氏から、そのコレクションをそっくり譲り受けたこと、また昭和 53 年には、明治 8 年頃の梅村翠山の彫刻会社にゆかりのある原田信道氏から、彫刻会社で印刷した彫刻凹版や石版印刷のラベルや株券、暦など多数の印刷参考品を手に入れた。

印刷時報社からは「カレンダー展出品作品」をこの 10 数年間、同社に保存してあったものを全部寄託されている。収集したものを一般に広く公開観賞に供するためには、常設展示室とか資料館を作るべきだと考えている。

印刷図書館の運営委員会が中心となって進めてきた印刷文化財保存運動の経過については、多くの人によって発表された提案、準備委員会の経過、あるいは専門委員会で協議してきた足跡を、今後広く展開するであろう運動の礎石とするため、図書館では昭和 53 年に「印刷文化財保存運動の記録」という冊子にまとめて刊行したのである。ぜひとも多くの方々の理解と協力をお願いします。

(5) 情報センターとしての役割担い

求められる経営基盤の安定

本木昌造没後百年記念講演会と明治初期印刷資料展

昭和 50 年 9 月 3 日に本木昌造記念講演会を開いた。この日は近代活版術の始祖となった本木昌造が、明治 8 年 9 月 3 日、52 歳で没してから、ちょうど 100 年目にあたるので、この忌日を期して印刷図書館では、本木翁を追慕する記念講演会を日本印刷会館 7 階の講堂で催した。この催しは日本印刷工業会、全日本活字工業会、ライブラリアンクラブの後援で開いたものである。当日の演題と講師は次の通りであった。

テーブルリーダー 山本隆太郎

「情報化社会の先駆者としての本木昌造」

飯田 賢一

「本木昌造を中心とした同時代の印刷事情」

八木 佐吉

「印刷文化史上における本木系活字の発展」

古川 恒

会場には印刷図書館所蔵の本木昌造の和歌を認めた直筆懐紙や短冊を始め、本木昌造の伝記資料、初期の活字見本帖、明治初年に刊行された活版本や木版本など約 80 点を展示したが、これらの資料は印刷図書館所蔵本のほか、八木佐吉、庄司浅水、牧治三郎、高部英治の諸氏から、その所蔵資料を多数出品されたものであった。この日の参加者は 100 名以上に達した。

印刷図書館の役員

財団法人印刷図書館は、現在以下の役員の人々によって運営されている。

理事長	大橋 貞雄	日本印刷工業会顧問
理事	澤村 嘉一	日本印刷工業会会長
同	矢板東一郎	日本印刷工業会副会長
同	長島 達雄	日本印刷工業会理事
同	下中 直也	印刷工業会理事
同	松島 義昭	印刷工業会理事
同	新村 重晴	印刷工業会理事
同	中川 俊方	日印工専務理事
同	磯野 光雄	全印工連専務理事
同	久永 舎春	東印工組副理事長
同	中村 信夫	日本印刷学会会長
同	塚田 益男	日本印刷技術協会会長
同	市村 道德	日本印刷技術協会理事
常務理事	沢田巳之助	印刷図書館館長
監事	鈴木 金蔵	日本印刷学会評議員
同	大熊 整	日本印刷工業会監事
同	中田 末男	日本印刷工業会理事

そのほかに評議員 33 名がいるが、評議員は日印工、全印工連、大手印刷会社、関連団体の代表者、学界関係から選任されている。

運営委員会

理事会は日印工、全印工連、印刷学会の首脳部の人々が主となり、評議員は関連団体の代表者や学界の人々によって構成されているが、図書館運営の実際面を担当して、この充実と発展とのために、協力する機関として運営委員会がある。この委員は理事長の委嘱による

15 名で、委員長には図書館の再開に最も熱心だった市村道徳氏を選出し、今日まで 15 年間、図書館の育成に力を尽されている。委員会には企画部、資料部、財務部があって、図書館の再開以来この運営委員の協力が大きな支えになっている。

現在の運営委員とその担当は次の通りになっている。

企画部＝安達秀雄、小堀正三、新村重晴、中津川泰三、小泉正好。

資料部＝山本隆太郎、川俣正一、坪井滋憲、高畑伝。

財務部＝高橋茂、久永舎春、中川俊方、高松三千男、秋山一郎。

これら運営委員の方々の努力には深く敬意と謝意を表すものである。

維持会員について

印刷図書館の経営は、維持会員の会費によって支えられ維持されている。図書館というと直接営利に結びつかないものであるが、印刷界にとって調査研究のために有用な機関であり、印刷の情報センターとしての役割を担っている。この専門図書館を業界の力で持っているということも、他の業界ではその例が少ないと思う。

印刷図書館の監督官庁である文部省社会教育課へは、毎年収支予算書や事業報告を提出しているが、その係官から「業界で図書館を経営するための年会費を支出しているケースは非常に珍しい。印刷業界はさすがに文化産業ですね」と誉められたことがあった。

現在の維持会員数は約 250 社であるが、その会員のすべてが図書館を利用しているとは限らない。しかし印刷界のために印刷図書館を存続することが必要だということを理解して支援され、会費を負担されているものと思う。

維持会費は 15 年前の再開当初に、業界に呼びかけて以来継続しているが、初めは 1 口を年額 5 千円と決めて発足、会社の規模などにより口数に差があるが、その後年々物価の上昇するにつれて、図書購入費、事務費、借室料、その他の諸経費も漸増してきたので会費の方も 7 千円に値上げ、次いで 1 万 2 千円となり、昭和 54 年度からは年額 1 万 5 千円に改訂されている。

この維持会員は現在 250 社ほどが協賛しており、総口数では 600 口ほどになっている。



維持会員会社の社員には、図書の貸出しや諸文献のコピーサービスなどの特典があるので、今後ともより多くの会社が維持会員に加入され、印刷図書館を利用してほしいものと考えている。

業界にとって貴重な資料を多数保存している図書館の意義を理解され、これからも新会員の増加によって、経営基盤の安定を図らねばならないものと思う。

印刷図書館は図書館再開 15 周年の記念事業を検討している。まだ具体案は煮詰っていないが、図書館が所蔵している貴重な資料、文献など印刷文化財の数々を公開展示し、印刷人ばかりでなく広く一般の人々にも見ってもらうことなどが考えられており、沢田館長は年内にも実施に漕ぎ着けたいとしている。

